

## 「牧口常三郎と創価学会」の史的研究序説

神 立 孝 一

### 1. はじめに

牧口常三郎に関する研究は、近年急速な発展を示している。これまで牧口研究の先鞭を取ってきた斎藤正二氏によれば、「牧口研究は<sup>ついに</sup>竟に第三段階に入った」という<sup>(1)</sup>。すなわち、「牧口研究が科学的合理的精神の所産以外の何物でもない」ものになったというのである。その具体的な例としてあげられているのが、塩原将行氏の一連の研究であり<sup>(2)</sup>、伊藤貴雄氏の哲学的考察である<sup>(3)</sup>。牧口の教育思想の分析研究もさることながら、その生涯についての実証的研究という分野が開拓され、その研究は徐々に厚さを増しつつあるといえよう。

本稿では、こうした諸研究を前提として、牧口が創始した創価学会について考えてみたいと思う。ただし、ここではその宗教的・思想的な内容を取り扱うのではなく、牧口自身が研究の場として発会した創価教育学会が、いかにして創価学会に変遷していったのか、という視点から考えてみようとするものである。そもそも創価学会の前身である創価教育学会は、教育者の集団から始まった。それは各地・各地域の教員が集まって教育学を学ぶための、牧口を中心とした研究会だったのである。この研究会がいつの時点で、多くの人々が信仰を中心に集まる大衆宗教団体になったのだろうか。そして、それは何をきっかけとして、いかにして移り変わっていったのか。少なくとも、日本においてこれだけ多くの民衆が宗教を通じて、ありとあらゆる運動、具体的には文化的、政治的、平和的運動を展開した団体というのは、いまだかつてなかった<sup>(4)</sup>。こうした視点からの牧口研究、および創価学会研究は現段階では皆無といえる。今後は様々な局面からの創価学会研究が発展していくと考えられるが、ここではその端緒として、牧口の人生を実証的に追いかけてながら、この問題について少々考えてみたいと思う。

### 2. 青少年期の牧口

牧口は明治4(1871)年に、現在の新潟県柏崎市荒浜で誕生した。6月6日のことであった。ただし、この日付は旧暦である。旧暦すなわち太陰暦から新暦の太陽暦への移行は、旧暦の明治5年12月3日を新暦の明治6年1月1日とすることで果たされた。したがって牧口が生まれた6月6日は、現在の我々にとっての7月23日にあたるのである<sup>(5)</sup>。

牧口は父・渡辺長松、母・イ子のもとに誕生した。したがって、その姓名は誕生時には「渡辺」であった<sup>(6)</sup>。名は「長七」。長七がまだ幼い頃に、父の長松は仕事の関係で北海道に渡ったという。その後、長松は新潟に戻らず時が過ぎ、母も何らかの事情で離婚する。この時期の事情については、今後の研究を待たねばならないが、荒浜を含む日本海に面した村々と北海道の関係や、それぞれの村々の慣習や社会的状況からすると、渡辺家だけが特殊な事情であったとは思えない<sup>(7)</sup>。牧口自身は、生家付近に居住していた父・長松の妹・トリが嫁いだ、牧口善太夫家の養子となる。ここで牧口姓に変わるようになった。

7歳の時、すなわち明治11年に牧口は荒浜小学校に入学する。いうまでもなく、この時期の日本は義務教育ではない。したがって学校への通学は自由であった。大正元年発刊の『荒浜村誌』によれば、ちょうどこの時期の就学者は64人である<sup>(8)</sup>。未就学者は308人。この頃の全国小学校の就学率は平均で32%であるから、荒浜村の17%は、全国の中でも非常に水準が低いことになる。こうしたなかで、牧口は小学校に通うことになる。

ところで、新潟県の日本海に面した荒浜という村は、寒村で何もないようなイメージがあるかもしれないが、荒浜は寒村でもなく、貧しい村でもなかった。むしろ豊かな村といえるかもしれない。無論、豊かさの基準というものが問題なのであろうが、ここでいう豊かさの源泉はいったい何であったのか。越後と佐渡の地誌である『越佐大観』には、荒浜村に関する次のような記述がある<sup>(9)</sup>。

「荒浜村は西中通村の北刈羽の西に接す。東に砂丘を負ひ、西北は海洋に臨む。西南悪田との界に鯖石川流れ、此より北東宮川に至る一里半の間は、砂丘連りて、地勢自ら独立せり。此地田畝豊ならざるも、村民漁獵製網繰舟の業を励み富家多し。産業事跡に曰く、『荒浜の牧口某、寛文年中、製網の方を工夫して、鮭、鯡等の御業をたすけたり。網工此に始まる。延宝元年、牧口庄三郎、手船に製網を搭載し、松前に航行して販売を試む。寛永年間に至り、使用者稍増加し、随ひて販路開け遂いで改良を加へ、天明年間より北海蝦夷漁場の需用頼とみに起り、漸次販売額を増加し、終に今日の盛大を為すに至れり。明治十五年頃荒浜村に製造者二千二百余人あり、一カ年平均の製額十萬(7,2)五千八百貫目、此価金三十五萬五千圓にして鯡網十五萬五千圓、鯡刺網四萬五千圓なり』と」

これによれば、荒浜村は特に漁網生産の技術水準が高かったことがわかる。すでに延宝元(1673)年の段階から、鮭や鯨を獲るための網の生産が始められ、「松前に航行して販売を試」みたと記されている。そしてそれが、江戸時代の後半、天明年間(1781-89)になると需要が高まり、販売額が激増したのである。そして明治15(1882)年には、製造者が2200名余りだといっているのである。明治4(1871)年11月付けの荒浜村の戸籍表によれば、村の総人口は2211人である<sup>(10)</sup>。『越佐大観』は、それから10年後の数値であるが、人口がこの間に増加したとしても、村の大半の労働力がこの漁網生産にあてられており、村にとっての一大収入源だったことがわかる。北海道での漁業が盛んになればなるほど、荒浜も潤うという構図が、こうしたシステムからうかがうことができよう。

さて、牧口は荒浜から志を立てて北海道へ渡るのであるが、この年代は現在のところ特定されていない。確実な史料が見つかっていないのである。ただし、明治22(1889)年の18歳の時に、現在の「北海道教育大学」である「北海道尋常師範学校」に第1種生として入学していることは確認されている。当時の師範学校の入学生には、1種・2種という区別があったようであるが、1種というのは、当時の行政単位である郡もしくは区の責任者である郡長・区長から推薦をされた者が対象となる。つまり推薦だけが必要で、無試験で入学が許可されたのであった。さらに師範学校生は授業料、生活費とも官費すなわち無料で、全寮制だったのである。それゆえに卒業後は必ず教員になることが、義務づけられていた。

明治26(1893)年22歳の時、長七は常三郎という名前に改名する。この改名の理由は、現段階でははっきりしていない。そして、明治29(1896)年25歳のときに結婚した。明治32年に養父の善太夫が亡くなり、常三郎は牧口家を継ぐことになった。「北海道尋常師範学校」卒業後、明治34(1904)年まで牧口は北海道で教鞭をとっているのである。

### 3. 校長時代の牧口と仏法

牧口が『人生地理学』の発刊を目指して上京するのは、明治34（1901）年4月のことであった。この目標は、様々な曲折を経て、2年後の明治36年に実現する<sup>(11)</sup>。この書は、周知のごとく新進気鋭の地理学者としての地位を、牧口に与えるものとなった。この間、女子教育や留学生の教育に携わり、新たな教育分野の開拓に従事する。また、明治44年（1911）には、農商務省山林局の嘱託として大分県の前津江・中津江・上津江の各村々、熊本県の南・北小国村の実態調査を行った<sup>(12)</sup>。そして、大正2（1913）年、42歳の時に東京市の東盛尋常小学校の第3代校長に就任するのである。これが、牧口の校長生活の始まりであった。

大正9（1920）年に後の戸田城聖との出会いが訪れる。当時牧口常三郎49歳、戸田城外20歳。その後、戸田は周知の通り牧口に師事し、様々な面で牧口を支えていくことになる。

牧口が仏法、特に日蓮の仏法にたどり着くのは、現段階では昭和3（1928）年に、三谷素啓との議論を通じてであったとされている。当時、日蓮研究者として知られていた三谷と、『立正安国論』等についてかなり白熱した会話が重ねられたと伝えられている<sup>(13)</sup>。そして、日蓮正宗に入信することとなるのである。このとき牧口は、白金尋常小学校の校長を務めていたのであるが、この入信について次のように述べている<sup>(14)</sup>。

「創価教育学の研究が次第に熟し、まさに第1巻を発表せんとした頃、不思議の因縁から法華経の研究に志し、そして進み行く間に余が宗教観に一大変革を来した」。

ここで述べられている、宗教観の一大変革については、自らの宗教遍歴を以下のように述懐している。

「もとは禅宗の家に生まれ、法華の家に養はれたのであったが、何等信仰の念はなかった。苦学力業の青年期に敬愛し親近した師友は、大概基督教徒であったが、遂に入信の程度には至らなかった。壮年上京以後儒教の道徳だけでは不安に堪へずして、再び禅に参じ、基督教に聴き、深呼吸法をも習ひ、其他の教説にも近づき多少の入信はしたが、遂に深入するには至らなかった。が古神道に基づく禊会には十数年間、夏冬の何れかに大概参加し、お陰で今もなほ毎朝の冷水浴は欠かさないほどに至ってゐる。が心から信仰にはいることはできなかった。何れも科学及び哲学の趣味を転ぜしめ、又はそれと調和するほどの力あるものと感ずる能はなかったからである」。

そして、さらに

「法華経に逢ひ奉るに至っては、吾々の日常生活の基礎をなす科学、哲学の原理にして何等の矛盾がないこと、今まで教はつた宗教道徳とは全く異なるに驚き、心が動き始めた矢先き、生活上に不思議なる現象が数種類現はれ、それが悉く法華経の文証に合致してゐるのには驚嘆の外なかつた。そこで一大決心を以て愈々信仰に入つて見ると『天晴れぬれば地明らかなり、法華を知るものは世法を得べき乎』との日蓮大聖人の仰が、私の生活中になる程と肯かれることとなり、言語に絶する歓喜を以て殆ど六十年の生活法を一新するに至つた」。

こうした論述から、牧口は自らの道徳的支柱を前々から宗教に求めようとしていたことがうかがえる。そのために、禅、基督教などを学び、また「古神道に基づく禊会」にも参加していたのである。しかし、こうした諸宗の活動でも納得できなかった「日常生活の基礎をなす科学、哲学の原理」を、法華経すなわち日蓮仏法との出会いのなかで獲得していくのである。それは牧口にとって、「言語に絶する歓喜」だったという。ここに牧口の一大転換点があるといえよう。ただし、それがそのまま多くの大衆が参加する宗教団体の運動にはなっていない点に、注意すべきである。それは一個人として、一教員として自らの思考のなかで組み立てられ、そして実

践に向かうものであって、他人をも巻き込む程の一つの運動形態にはなっていない。まさに、本人が納得した段階といえる。「生活上に不思議なる現象が数種類現はれ」ということが、具体的に何を指しているのか明らかにはされていない。ただ、教育者として、また研究者として、さらには校長という管理責任者としての様々な問題とともに、一個の人間としての煩悶があったであろうことは十分に推測できる。それらが「天晴れぬれば地明かなり」というように、一気に払拭したというのである。

「暗中摸索の不安が一掃され、生来の引込思案が無くなり、生活目的が愈々遠大となり、畏れることが少くなり、国家教育の改造を一日でも早く行はせなければならぬといふような大胆なる念願を禁ずる能はざるに至った等がそれである」  
というように、生活が一新したというのである。まさに「人間革命」の一瞬だったといえよう。

#### 4. 教育研究から宗教運動へ

さて、こうした変化が、後々の宗教運動にどのように結びついていくのであろうか。

昭和5（1930）年11月18日は、創価学会の創立記念日とされている。これは、牧口の『創価教育学体系 第1巻』の発刊日でもあるが、この日をもって、牧口が戸田城聖と2人で創価教育学会を創立したのである。

牧口は校長を務めながら研究を進め、翌6年には『第2巻』、7年には『第3巻』、9年には『第4巻』というように次から次へと成果を発表していく。昭和7（1932）年61歳の時に退職となり教職を離れることになったのであるが、牧口はその時期から創価教育学という学問を中心にし、仏法を基盤とした研究会を展開し始めていくことになる。「創価教育学会々則要項」の目的の条目には、

「本会は創価教育学大系を中心に教育学の研究と優良なる教育者の養成とをなし、国家教育の改善を計るを以て目的とす」

と明記されており、この目的を果たすために「教育研究所」の設置や研究会、講演会、講習会を開催していくことが謳われている<sup>(15)</sup>。

こうして創立された創価教育学会に、一つの教育研究会、教育学の勉強会ということで様々な青年教師たちが集いはじめることになった。その中心者が牧口だったのである。但し、それはただ単なる学術的な研究にとどまるものではなく、教える側すなわち教員自身の人間鍛錬と確固たる哲学的基盤の構築ともいべきものも含まれていたと考えられる。その具体的な事例として、昭和11（1936）年に「第一回創価教育学会修養会」が静岡県富士宮市の大石寺で行なわれている。これには牧口はもちろん、数名の若き教員達が参加していた。この修養会は、明らかに宗教的行為を伴うものであり、教員自らの成長をそれによって計っていこうとする意図が読みとれる。したがって、それを良しとしない人々は、自然と創価教育学会から去っていった。この時期には、会員の出入が少なからずあったようである。

そもそも研究活動から始まった創価教育学会であるが、この団体が昭和10年代中頃から徐々に宗教運動の団体に変化していく。その一つの表れが、牧口自身の変化である。たとえば、昭和15年に校長時代の後輩である窪田正隆氏に宛てた葉書の文面が残されている<sup>(16)</sup>。ここには、「ただし例によって話はいつも信仰の事にとか」という文言がある。日常的に、後輩の教員に信仰の話が続けていたことがうかがえよう。そして、

「之は品物よりは金銭が、小利よりは大益が、それよりも金銭等の小利益を創造する生活法が、その小法よりは大法が、枝葉よりは根本が、部分的よりは全体的が等と、次第に高次

の原則へと要求した結果、到達したものに有之、一たん最大の生活法に到達した以上は次善三善等の法の下級を与ふるは慳貪に墮するとの仏説に謂はざれば法罰がてき面なる代りに之に反対するものも同様に当るべしその教えに御届とて早く安全地帯に共同生活を希望する義に候」

と述べられている。牧口が依って立つ基盤としていたものが、「価値論」であったことは周知のことであるが、この価値論が微妙に変化しているのである。どうすれば価値的な教育ができるか、どうすれば価値が生まれるか、価値を教える自分はようになっていけばいいのか、という牧口の言説が、仏法を学んでいく過程でそれを基調とした「価値論」となり、いわゆる「罰論」が挿入されてくるのである<sup>(17)</sup>。価値あるものを語らないことは、悪であり罰を受けるということになる。但し、この事例はあくまでも後輩の教員を対象にしたものであり、教員自身が変わっていくことが教育にとって重要だ、という視点をもっているといえよう。その意味では、教員の研究団体たる創価教育学会の枠組み内のものだったのである。

もう一つ別の側面から考えてみよう。昭和18(1943)年の7月6日早朝、牧口は下田署の特高刑事2人によって、静岡県須崎において逮捕された。罪名は治安維持法違反並びに不敬罪であった。このときの逮捕の理由が『特高月報』の昭和18年7月号に掲載されている<sup>(18)</sup>。それによれば、

「会長牧口を中心とする関係者等の思想信仰には幾多不逞不穩のものありて、豫てより警視庁、福岡県特高課に於て内偵中の所、牧口会長は信者等に対し『天皇も凡夫だ』『克く忠になどとは天皇自ら言はるべきものではない。教育勅語から削除すべきだ』『法華経、日蓮を誹謗すれば必ず罰が当る』『伊勢神宮など拝む要はない』等不逞教説を流布せるのみならず(中略)皇太宮に対する尊厳冒瀆竝に不敬容疑濃厚となりたる為同庁に於て、本月七日牧口常三郎外五名を検挙し」

とされている。ここで注目したいのは、「豫てより警視庁、福岡県特高課に於て内偵」という一節である。「内偵」というのは、いわゆるスパイ行為のことといえよう。それが一定期間、創価教育学会ならびに会長である牧口自身に対して行われていたということなのである。その具体的な動きをしていたのが、「警視庁」と「福岡県特高課」であった。「警視庁」というのは言うまでもなく、東京都の治安警備を任務としている。東京では活発に創価教育学会の活動が行われているのだから、警視庁の刑事たちがそこで内偵するのは当然であろう。しかし、逮捕地が静岡県でありながら、『特高月報』に記載されているのは福岡県特高課である。なぜ福岡県なのか？それは、東京以外で創価教育学会が、特高の内定を受けるほどに活発な活動をしていたのが、福岡県域であったことの証左なのではないだろうか。そうでなければ、警視庁、特高は注目しないはずである。

「不敬罪」「治安維持法」といった、いわば戦時国家における典型的な不逞分子逮捕の理由はまた、その対象を当時の国家権力が恐れていたことを示すことにもなる。すなわち、国家権力に恐れを与えるほどの活動が福岡県で行われていたのである。創価教育学会という研究者の団体が、創価学会という大衆運動に転換したきっかけのひとつを、この記述から福岡県に求めることができるのではなかろうか。特に、東京の活動は、教育者を中心としたものだったようであるが、教育関係者以外の、いわゆる普通の人が信仰を始めるきっかけが福岡県にあるのではないか。

そこで、昭和10年以降の福岡県における牧口の足跡を調べてみた。いくつかの事例が確認できるのであるが、そのなかで教育関係者以外の創価教育学会の活動ということになると、ほん

のわずかししか見いだすことができない。そのなかにあつて、福岡県内の活動は昭和14年の春、牧口が68歳のときに八女郡福島町の田中国之宅を訪問したことが発端であつた、という事実が浮かび上がってくる<sup>(19)</sup>。

このときの牧口の目的は、國次の妻であるシマヨの折伏であつた。当時の田中家は八女のなかでも大きな紙販売店であつた。このときの当主である國次は、これまた八女有数の商家である木下家からの養子であつた。ちょうどこの昭和10年代に、國次・シマヨ夫妻の長男である淳之は中学校に通うために上京する。それは、國次の実の弟である木下鹿次がはやくから東京に出ており、その関係からのことであつたという。そして、その木下鹿次はすでに牧口に折伏され、信仰していた。淳之はすぐに牧口によって、叔父同様折伏され入信する。それを聞いた父の國次は、それを止めるべく上京するのであるが、結局牧口に来てこれまた入信することとなつた。ところが、この二人が牧口に訴えることによれば、妻であり母であるシマヨが納得しない限り、田中家では信仰を続けることができない。そこで牧口は、自らが出かけていって、このシマヨを説き伏せよう、ということになつたのである。この田中シマヨの頑固さが牧口を九州に呼んだのであつた。

牧口と出会つたときの印象を、シマヨは

「謹厳実直な方で人柄から溢れ出る優しさに胸打たれる思いがした」

と語っている。シマヨは牧口の理路整然とした話に納得をする。そして、その日の夜に入信を決意した。入信を決意したその翌朝、牧口は田中夫妻に

「わかつたら実践だ。私はこれから雲仙に折伏に行くから、あなたたちもついてきなさい」こう言つて折伏に向かつたという。前日に入信決意をしたシマヨは、牧口についていった。こうして、いわば教育とは全く無関係の一人の婦人が信仰を始めたのであつた。

この事例からもわかるように、この昭和10年代の中頃から、創価教育学会という研究者の集団は、次第に大衆の宗教運動に転換をしていく。急激な変化ではないが、確実な変化が見て取れるのである。牧口はその後、昭和15・16年にも福岡県を訪問している。昭和15年は、11月上旬から下旬にかけて約二週間の日程であつた。東京を出発して4日目に博多に到着。この時に福岡市川端町の金川末之宅を訪れ、座談会に出席している。この折に和服姿の肖像写真を撮つた。これが、現在広く知られている牧口の肖像写真である。その後田中宅に行き二日間、座談会を開催している。

また、翌昭和16年11月15日に福岡県の二日市にある武蔵屋旅館で開催された、創価教育学会の第一回九州総会に牧口は出席した。したがつて牧口は、昭和14年を皮切りに、3年連続して九州を訪問しているのであるが、そこでの創価教育学会の活動は、一つの大衆宗教運動として展開されていく。その証拠として、武蔵屋旅館で開催された九州の総会には、何人かの特高の刑事が監視のために会場にいて、牧口の話しの途中で様々なやじを飛ばした、という記憶が語られている<sup>(20)</sup>。創価教育学会が単に教育関係者の研究活動から、多くの人々による宗教活動へと移り変わつていった姿が、そこに垣間見えるのである。

## 5. むすびにかえて

創価教育学会が、教員を中心とする教育研究活動から、誰もが参加できる大衆宗教運動へと転換した節目を求めて、考察を行つてきた。当然ながら、それは目に見えるかたちの画然としたものではない。おそらく多局面から、徐々に少しずつ変化していったのであろう。だがしかし、これまでの様々な資料や聞き書きからすると、現段階では昭和10年代の中頃にその区切れ

目を見いだすことができるように思える。その一つの事例が、福岡県八女市の田中家の状況である。

歴史のなかで、ひとつの活動あるいは運動が、どのようにして多くの人々の心をつかみ、またそれがどのようにして大きな影響力を有するようになっていったのか、ということは興味深い問題のひとつである。創価教育学会と牧口については、まだまだ未開拓の分野ばかりである。探求しなければならない課題はあまりにも多いといえよう。今後の研究の進展を心より期待するとともに、自らも研鑽に励みたいと思う。

(注)

- (1) 斎藤正二「牧口常三郎研究は第三段階に入った」(『学光』2001年6月号、創価大学通信教育部) 20頁。
- (2) 塩原将行「上京後の牧口常三郎と『人生地理学』出版に至る経過」(『創大教育研究』第11号、2002年3月)、同「牧口常三郎と通信教育—民衆のための教育を目指して—」(『通信教育部論集』第3号、2000年8月)、同「牧口常三郎と郷土会—内郷農村調査の参加者とその成果—」(『東洋学術研究』第39巻第1号、2000年5月)等がある。
- (3) 伊藤貴雄「J・F・ヘルバルトの類化論と初期牧口思想の形成」(『東洋哲学所研究紀要』第16号、2000年12月)、同「牧口常三郎とヤヌシュ・コルチャック」(『創価教育』第18号、1996年)がある。
- (4) 創価学会の会員数は、「創価学会公式ホームページ」(<http://www.sokagakkai.or.jp/sokanet/>)の2003年1月の基本データによれば、821万世帯である。
- (5) 斎藤正二氏は、前掲稿で「牧口誕生日を二回祝うようにしたい」と提唱されている。
- (6) こうした家系の関係については、本号収録の若井絹夫「牧口常三郎の生家に関する考察」に詳しい。
- (7) 本号収録の森幸雄「牧口常三郎における地縁的ネットワークの可能性」などを参照されたい。
- (8) 『荒浜村誌』(荒浜村誌編纂委員会編、大正元年発行。現在は柏崎市立図書館蔵)の明治7年付、就学概況による。
- (9) 『越佐大観』(越佐会、1916年) 154頁。
- (10) 「与板県第五区戸籍表」(新潟県柏崎市立図書館蔵「牧口家文書」)による。
- (11) この点に関する詳細は、前掲注2塩原論文を参照されたい。
- (12) この調査に関しては、当センターでも様々な点から調査中である。またこのときに牧口が作成した報告書は、高い評価を得たようで、昭和5年に刊行された『郷土研究家名簿』(農村教育研究会編)には、本文中の5ヶ村の調査研究が主たる業績として掲げられている。
- (13) 年譜・牧口常三郎 戸田城聖編纂委員会『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』(第三文明社、1993年) 60-61頁。
- (14) 「創価教育学体系梗概」(『牧口常三郎全集 第8巻』、第三文明社、1984年、405頁)の「結語」。
- (15) 「創価教育学会要覧」(『牧口常三郎全集 第8巻』、第三文明社、1984年) 418頁-422頁。
- (16) 本号所収の「新資料紹介(1)」に全文が掲載されている。
- (17) この見解は、香川短期大学・古川教教授のご教示によるものである。
- (18) この点については、伊藤貴雄「21世紀に光彩放つ『民主の精神』」(『創価新報』2001年6月6日付)による。
- (19) 田中家の事例に関しては、当センターが2001年度に様々なかたちで調査をさせていただいた。この調査にあたり、田中家の現当主であられる田中博典様、お母様のウタ子様、また北村美智子様には史料の閲覧と使用、また聞き取り調査を含め大変にお世話になった。記して謝意を表したい。
- (20) 市川喜久郎編『牧口常三郎先生の思い出』(聖教新聞社九州編集総局、1976年)。

「牧口常三郎と創価学会」の史的研究序説

\*本論稿は、2002年3月10日に福岡県久留米市の「久留米牧口記念会館」において開催された講演「牧口先生の実践と九州」を、大幅に加筆訂正したものである。お世話になった関係者の方々に、この場をお借りして心より御礼申し上げたい。